

エドワード・G・サイデンステッカーは、「源氏物語」をはじめ、川端康成の「雪国」、谷崎潤一郎の「細雪」など、古典から近代にいたる名作を英訳した翻訳家です。

1921年にアメリカのコロラド州に生まれ、コロラド大学で英文学を専攻したのち、海軍日本語学校に学びました。第二次大戦後、日本に滞在した際に日本の文化に関心を深め、日本文学の研究に手を染めました。62年から、スタンフォード大学、ミシガン大学、コロンビア大学で教壇に立ち、親交のあったドナルド・キーン氏と日本文学研究の双璧として活躍。そのかたわら多くの作家たちと交流し、手がけた翻訳を広く世界に紹介しています。

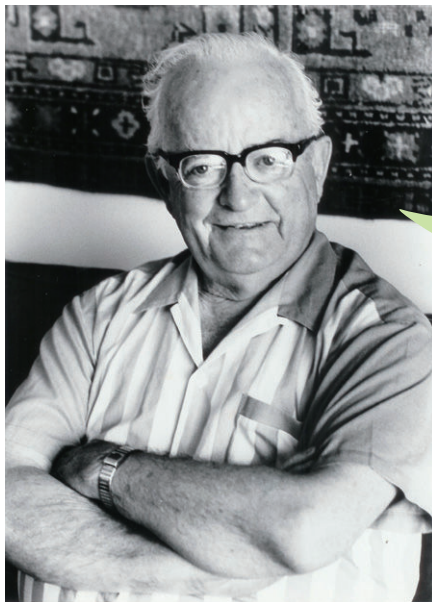
特筆すべき業績の一つは、川端康成のノーベル文学賞受賞に寄与したもので、川端自身が「ノーベル賞の半分はサイデンステッカー教授のもの」と、その功績をたたえています。

日本では好んで東京の下町に暮らし、「サイデンさん」という愛称で親しまれていました。2006年、日本とアメリカを歩き来しながらの生活に終止符を打ち、日本への永住を決意。その後まもなく、湯島の自宅近くの不忍池を散策中に転倒し、帰らぬ人となりました。

本展では、およそ500点におよぶ「かえる」コレクションの中から逸品、珍品を展覧し、氏の業績を紹介するとともに「古き良き日本」への想いを皆様へ届けます。



永井荷風の俳画 昭和37年、アメリカに帰国する際に川端康成から餞別として贈られた。「龍膽や山の手早く冬降る 敗荷」とある。「敗荷」は荷風の俳号。(日本近代文学館蔵)

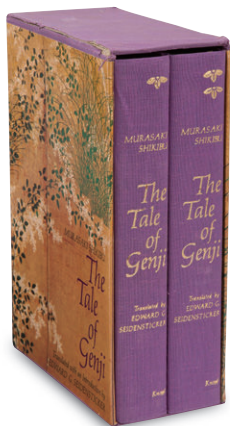


エドワード・G・サイデンステッカー
(Edward G. Seidensticker: 1921-2007)

「蛙が好きになったきっかけというのは、実は日本の小さな両蛙にはじめて出会ったときからである。」〈中略〉

「机上に置いて毎日ながめているうちに、この(蛙の)木彫はますます私の気を引くようになった。それと同時に、蛙というものがなかなかおもしろい形をしているものだということを私に気付かせてくれたようだ。以後、出先で蛙の装飾品を見かけるとなんとなく気にかかるようになり、ある日、相棒がいなくてはおかしいという理由で買い足したのをきっかけに、ひとつまたひとつ手を出すようになった。気が付くと、本棚の一部はいつのまにか蛙に占領されていたのであった。…」

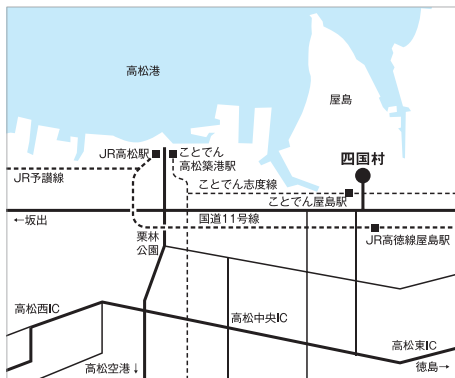
『谷中、花と墓地』から



“The Tale of Genji”
クノッフ社、1978年
サイデンステッカー翻訳の英語版『源氏物語』(紫部著)、
名訳として評価されている。



象牙の根付 右は木株に坐り、左は背に小さな亀を乗せている。



会期:2012年 4月28日(土) — 7月1日(日) (期間中、資料保護のため、一部展示替えがあります)

開館時間:9:00~17:00 (入館は開館時間の30分前まで) 会期中無休

企画展入村料()内は企画展前売券:一般1,200円(1,100円)、高校生700円(600円)、小中学生500円(450円)、幼稚園児以下無料

主催:公益財団法人四国民家博物館 協賛:カトーレック株式会社

交通アクセス

お車で:高松自動車道高松中央ICより北へ8km 約15分

志度ICより西へ約20分/JR高松駅より東へ約20分/高松空港より北へ約40分/鳴門ICより西へ約50分

無料駐車場:バス5台・普通乗用車200台

電車で:新大阪→高松約2時間→JR高徳線屋島駅下車→徒歩10分/ことん志度線ことん屋島駅下車→徒歩5分

飛行機で:東京→高松 約1時間15分